

マルコ 10 章 46－52 節 「上着を脱ぎ捨てて」

イエスさま一行は、エリコに到着しました。これからイエスさまはエルサレムに入られ、受難物語が始まろうとしているその最中の出来事です。

バルティマイという盲人の物乞いが、騒々しい物音の原因が「ナザレのイエス」が近づいたためだということを知ると、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫び始めたのです。「ダビデの子」、つまり救い主はダビデの子孫から生まれるという、旧約からの約束をバルティマイは知っていて、その救い主こそイエスさまだと考えていたからこそ、呼びかけだったのでしょう。当然ですが、盲人バルティマイは、自分の目を見たことを根拠に反応したのではなく、聞いたことを根拠に反応したことが分かります。このように信仰とは聞くことから始まるのです。目が見えない人は普通の人より、直感が鋭くなったり、あるいは聴覚が敏感になると言われていますが、バルティマイは、この時を見逃さずイエスさまに対し信仰をもって「ダビデの子イエスよ」と叫び続けました。

バルティマイが叫ぶと、多くの人々が彼を叱りつけて黙らせようとしていました。マルコによる福音書は、この世に蔓延している偏見について戒め続けてきたと言えるかもしれません。神の国には、この世において当たり前とされている偏見とか差別などはまったく通用しません。そこでイエスさまは立ち止まられ、バルティマイを呼んでくるように言われました。

ここで、私たちはバルティマイの大きな信仰について、三点に注目していきたいと思います。第一に、50 節の、「盲人は上着を脱ぎ捨てて」です。これは、毎日物乞いをするために半分をお尻の下に敷いて、残りの半分の道端に広げて、施しを受けるための風呂敷として用いていたと考えられます。夜になれば、上着は布団の役割を果たしました。したがって、バルティマイにとって、この上着は彼の唯一の財産でありました。それを捨て去り、躍り上がって、イエスさまの前に出て来ました。彼は自分の財産を捨てて、イエスさまの招きに応答することができたのです。第二に、51 節イエスさまが「何をしてほしいのか」と尋ねています。この質問も少し前にヤコブとヨハネに、イエスさまがした質問と同じでした。ヤコブとヨハネは、イエスさまの右と左の座を要求しましたが、バルティマイは「目が見えるように」なることを要求しました。イエスさまは、ヤコブとヨハネの願いを聞き入れてくれませんでした。バルティマイの願いは、聞き入れてくださいました。御心に適う祈りだったからです。私たちは神さまに対してどんな願いでも、どんな祈りでも捧げていいのです。御心に適う祈りなら、すぐに祈りの答えが与えられるでしょうし、たとえ御心に適わなかったとしても、私たちの願いの答えとして、必ず「主の導き」が与えられるからです。第三に、イエスさまの「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」という癒しの御言葉です。信仰の核心とは、何よりも、自分の弱さや頼りなさを認めることにあるのです。それが、「私をあわれんでください」という謙遜な願いとして現されています。

彼に起こった何よりの変化とは、道端で物乞いをしている生活から、主イエスに従って、道の真ん中を歩いて行くということでした。バルティマイは、まさにイエスさまに徹底的にすがろうとしたという意味で、主が喜ばれる信仰を持っていたのです。見えないからこそ、弟子たちの言葉を聞いただけで、自分のすべてを捨て置いてでもイエスさまのもとについていきました。彼こそ、弟子たちに中で最後に主イエスのもとに来た弟子と言えるかもしれません。それは彼が、変わりたいと心から願っていたからです。あなたは本当に、自分の生き方を変えたい、変えられたいと願っているでしょうか。信仰においては何よりもそれが問われています。この神の子主イエス・キリストに、私たちは絶対の信頼を寄せて、平安の内に歩みたいと願います。